

人間の発達に関する保健医療系大学生の知識 — 乳児期，幼児期，児童期，思春期・青年期に焦点を当てて —

森 慶輔

足利工業大学教職課程センター

要旨

【目的】 本研究では人間の発達，特に乳児期，幼児期，児童期，思春期・青年期の発達について，保健医療系学部所属する大学生がどのような知識を持っているのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】 2016年度に，関東地方 A 県にある B 大学保健医療系学部第 1 学年に在学し，筆者が担当した「発達心理学（後期 15 コマ）」を受講した，男子学生 3 名，女子学生 38 名の，「乳児期」「幼児期」「児童期」と「思春期・青年期」の発達に関する小テストの回答を分析した。

【結果】 乳児期，幼児期，児童期，思春期・青年期とも，項目によって知っている割合が大幅に異なり，一様に理解されていることもあれば，あまりよく知られていないこともあることが明らかとなった。

【結論】 学生自身の体験等で理解しやすい事柄については正しい知識が身につく一方で，そうでない事柄は誤った知識を身につけている可能性が示唆された。

キーワード：発達心理学，乳児期，幼児期，児童期，思春期・青年期

はじめに

保健医療職者を目指す者は人間の発達に関する基本的な知識を持っていることが必須である。しかし，日本の学校教育において，人間の発達を体系的に扱う教科は存在せず，中学校や高等学校の保健体育や家庭科で扱う程度である。つまり，人間の発達全般について科学的，客観的な理解を深める機会は大学に入学するまでないといっても過言ではない。そのためか，人間の発達に関して，誤った，曖昧な知識を持っている大学生が多いように感じられる。

例えば，丹治哲雄ら¹⁻³⁾は，大学新生への

調査の結果から，「子供は善悪の感覚を持って生まれてくる」という設問の誤答率が 10%前後である一方で，「平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば，普通より 2 か月はやく歩けるようになる」という設問の誤答率は 30 ~ 50%，「赤ん坊にとって幸福なことに，人間の女性には元来強い母性本能を持っている」という設問に至っては誤答率が 70%前後であることを報告している。木島恒一ら^{4,5)}は，大学新生への調査の結果から，「幼児の記憶力は大人よりも優れている」という設問の誤答率が 90%近くに上り，発達心理学に関する 7 つの設問のうち 5 つが正答率 50%を下回り，また高校生で

も同様の傾向を示したことを報告している。

このように、高校生や大学新入生の人間の発達に関する知識はあやふやで、曖昧であり、素人理論⁶⁾、常識心理学⁷⁾や通俗心理学⁸⁾と呼ばれる、科学的知識に基づかない、家族や友人による影響、マスメディアからの情報、インターネットによる検索などにより形成された、不正確な知識体系に留まっていることが想定される。

また、渡辺弥生⁹⁾は、保健所の乳幼児健康診査に来所した母親を対象とした調査から、子どもの発達に関する正確な知識を持って子育てをしている親がかなり少ないことを明らかにしており、歳を重ねれば、あるいは経験を積みれば、知識が蓄積されるというわけでもないと考えられる。

こうしたことから、本研究では、人間の発達について、将来保健医療職者を目指す、保健医療系大学に入学した学生が、どのようなことを知っていて、どのようなことは知らないのかを明らかにし、どのような点を重視して人間の発達について理解を深めさせるべきかを考察することを目的とした。

方法

2016年度に、関東地方A県にあるB大学保健医療系学部第1学年に在学し、筆者が担当した「発達心理学（後期15コマ）」を受講した、男子学生3名、女子学生38名、合計41名の小テストの回答を分析した。なお41名全員が2016年度前期に心理学の講義を履修していたが、この心理学の講義では発達心理学の内容を扱っていなかった。

この発達心理学の講義は、大きく「生涯発達心理学の内容」と「発達相談に関する内容」で構成された。今回の小テストは、生涯発達心理学の内容を扱う講義の際に実施された。第1回目の講義時に講義の進め方を説明するとともに、本研究の趣旨を口頭で説明した。そして、小テストの成績は単位認定に影響せず、小テストを基に実施するまとめテストの成績だけが単位認定に影響すること、研究に小テストの回答データを使用する際には個人名が特定されないようにすることを説明し、回答データの利用に協力を求めたところ、受講学生全員の下承が得られた。なお、小テストの回答

に際し、受講学生には事前に予習しないことを依頼し、回答に際しては自分の思った通りに回答するよう指示した。

小テストは、第2回の講義から第7回の講義で、「乳児期」「幼児期」「児童期」「思春期・青年期」「成人期」「老年期」の6つに分けて実施され、1コマ90分の講義の冒頭の20分程度で回答を行い、残りの60分程度で解答解説を行う形で実施された。小テストの質問項目は20問とし、厚生労働省や内閣府等が実施した各種調査データ、民間団体等が実施した各種調査データ、改訂日本版デンバー式発達スクリーニング検査（JDDST-R）、小野寺敦子¹⁰⁾、高橋一公¹¹⁾等を参考に作成された。なお講義進行の都合上、必ずしもその発達段階に適合していない、あるいは他の発達段階にも当てはまる質問項目や高等学校卒業時点で知らないであろう知識を問う質問項目も出題している（例えば、乳児期の設問14・17・18、幼児期の設問2・4、児童期の設問11・13、等）。

本稿では、このうち第2回に実施した「乳児期」、第3回に実施した「幼児期」、第4回に実施した「児童期」、第5回に実施した「思春期・青年期」の小テストの回答結果について、質問項目毎に正答者数と誤答者数、全体に占める正答者の割合（正答率）を求めた。これらは2016年10月から11月にかけて実施された。なお本研究は足利工業大学研究倫理委員会の承認を得て、実施された（足利工大倫委第18号）。

結果

乳児期の知識を問う小テストの項目、解答、正答者数、誤答者数及び正答率をTable 1に、幼児期の知識を問う小テストの項目、解答、正答者数、誤答者数及び正答率をTable 2に、児童期の知識を問う小テストの項目、解答、正答者数、誤答者数及び正答率をTable 3に、思春期・青年期の知識を問う小テストの項目、解答、正答者数、誤答者数及び正答率をTable 4に示した。

乳児期については、No.5, 14, 20は正答率90%以上であった一方、No.11, 17は正答率が1桁であった。幼児期については、No.12, 13, 14, 15, 20は正答率90%以上であり、正答率

Table 1 小テスト「乳児期」の回答結果 (n=41)

No	設 問	正解	正答者数	誤答者数	正答率
14	2歳から3歳にかけて、さまざまな感情が発達していくので、大人は子どもの感情を読み取り、言葉でフィードバックすることが大切になる。	○	41	0	100%
5	新生児は昼夜を問わず寝ていることが多く、平均して1日の2/3は寝ている。	○	40	1	97.6%
20	妊婦の飲酒喫煙はよくないとされているが、妊娠初期でなければ、ごく少量であれば問題はない。	×	40	1	97.6%
8	赤ちゃんは6,7ヶ月くらいでお座りができるようになる。	○	33	8	80.5%
9	赤ちゃんは1歳頃までにはハイハイをするようになる。	○	33	8	80.5%
15	赤ちゃんは生後5,6ヶ月くらいから「パーパー」「ダーダー」のようなおしゃべりをはじめめる。	○	30	11	73.2%
18	4,5歳で、友達とスムーズに意思の伝達ができるようになり、幼児語もほぼ見られなくなる。	○	30	11	73.2%
6	新生児は産まれてすぐでも、ほんやりと目が見え、声が聞こえている。	○	29	12	70.7%
13	赤ちゃんは生後直後からあやすと微笑むことができ、口を開けて、声を立てて笑うこともある。	×	29	12	70.7%
19	生後数ヶ月の間に特定の人と情緒的な「きずな」を築くことが、その後の対人関係に重要な役割を果たす。	○	29	12	70.7%
7	赤ちゃんは1ヶ月くらいで首がすわる。	×	26	15	63.4%
16	赤ちゃんは1歳ころになると意味のある言葉(単語)を話すようになる。	○	24	17	58.5%
1	赤ちゃんが母親のお腹のなかにいる期間はほぼ()週である。	40	22	19	53.7%
3	以前に比べて、出生時の平均体重は増加している。	×	22	19	53.7%
2	出生児の平均身長は約()センチメートル、平均体重は約()グラムである。	50と3000	21	20	51.2%
12	赤ちゃんの感情は1歳前後で基本的な感情が出そろうと考えられている。	×	13	28	31.7%
4	出産3~4日で赤ちゃんの体重は(増える・変わらない・減る)。	減る	9	32	22.0%
10	赤ちゃんは、ほっぺたをつつくとつつかれた方向に頭を向けたり、口唇に指をつけると吸い付こうとするが、生後3,4ヶ月でこうしたことをしなくなる。	○	8	33	19.5%
11	赤ちゃんにもさまざまな個性がある。アメリカの小児科医、トマスとチェスによれば、いわゆる「育てやすい子ども」は全体の()%であるとされる。	40	2	39	4.9%
17	3歳くらいになると「ボクのクルマ」のような2語文を話せるようになる。	×	1	40	2.4%

注: No11については、10, 20, …, 90のいずれかで回答するように指示した。

Table 2 小テスト「幼児期」の回答結果 (n=40)

No	設問	正解	正答者数	誤答者数	正答率
15	幼児は見た目に惑わされる傾向があり、同じ量のジュースでも細長い容器に入れると多くなったように思ってしまう。	○	40	0	100%
20	子どもの遊びは、生後数ヶ月の一人遊びからはじまり、3歳ぐらいまでの並行遊び（一緒に居るだけで、自分の好き勝手に遊んでいる）、年少、年中児の連合遊び（一緒に遊んでいるが、自分の好き勝手に遊んでいる）、年長児以降の集団遊び（数人でルールのある遊びを楽しむ）へと発展していく。	○	39	1	97.5%
12	幼児期に重要なことは自己主張と自己抑制を身につけることであるが、近年自己抑制が（我慢が）できない子どもが増えている。	○	38	2	95%
13	幼児は自己中心的にしか物事を判断できず、他者の視点に立って考えることが難しい。	○	37	3	92.5%
14	幼児はおもちゃや絵本など生命のないものに生命や意思があると考える。	○	36	4	90%
19	幼児期は、けんかやいざこざを通して、自分の主張をぶつけ合い、お互いの気持ちに折り合いをつけ、仲直りすることを学び、社会性を身につけていくのがよいため、けんかやいざこざに大人が過剰に介入するにはよくない。	○	34	6	85%
18	3歳ぐらいの子どもはひとりごとを言うようになるが、これは自分の内面で思考をする（心の中で考える）ようになったことを示している。	○	33	7	82.5%
1	赤ちゃんの頭にはへこみがあり、1歳半から2歳ぐらいまでに完全に閉じる。	○	30	10	75%
16	1歳半ぐらいから何かをする「ふり」をするようになり、2歳ぐらいから役割を演じる「ごっこ遊び」をするようになる。	×	26	14	65%
3	1歳半ぐらいには積み木が3つ以上積めるようになる。	○	25	15	62.5%
6	()歳ぐらいになると、走ったり、ボールを蹴ったりできるようになる。	2	21	19	52.5%
4	1歳になる前に指さしをできるようになる。	○	20	20	50%
8	2歳になるころには自分の名前や年齢を言えるようになる。	×	18	22	45%
10	指しゃぶりは歯並びや噛み合わせに影響するが、3歳頃までは特に禁止する必要はないと保護者に話すことが大切である。	○	17	23	42.5%
11	2, 3歳の時期はイヤイヤ期、第一反抗期などと呼ばれ、ワガママを押し通そうとすることから、大人の言うことを聞かせるように躡けることが大切である。	×	17	23	42.5%
17	3歳頃には現実と異なる信念（誤信念）を持つようになり、誤信念に基づいて行動できるようになる。つまり3歳頃から相手の気持ちがわかるようになる。	×	17	23	42.5%
7	()歳を過ぎるとハサミで紙を切ったり、ボタンをはめたりできるようになる。	3	16	24	40%
9	昔に比べてオムツを取る（トイレで自分で排尿排便させる）時期は早くなっている。	×	14	26	35%
2	赤ちゃんは()ヶ月前後から歯が生え始め、2歳頃に生えそろう。	6	10	30	25%
5	1歳半ぐらいだと、自分の名前を呼ばれると目を合わせて反応したり、バイバイといわれると自分のほうに手のひらをむけてバイバイ（逆さバイバイ）をする。	×	8	32	20%

Table 3 小テスト「児童期」の回答結果 (n=40)

No	問題	正解	正答者数	誤答者数	正答率
12	児童期の発達で重要なことは、失敗経験と成功経験を繰り返しながら「有能感」を獲得していくことである。	○	40	0	100%
14	小学生の時期は教師の影響が大きい時期であり、教師の期待とそれに応じた行動が、児童にポジティブな影響を及ぼすことが知られている。	○	39	1	97.5%
8	現代の小学生のスポーツテストの成績と、その親が小学生だったころ(30年前の小学生)のスポーツテストの成績を比較すると、(今のほうが優秀・昔のほうが優秀・変わらない)。	昔のほうが優秀	38	2	95%
6	小学生は大人が手取り足取り教えないと、いろいろな行動を学んでいくことができなくなる。	×	33	7	82.5%
7	小学生でも、具体的に理解できるものは、論理的に思考することができる。	○	33	7	82.5%
20	児童相談所の虐待に関する相談対応の件数について、その年齢構成を見ると、小学生が1/3を占めている。	○	33	7	82.5%
10	小学生くらいなら、多少失敗が続いても、やる気がなくなることはない。	×	32	8	80%
15	近年ライフスタイルの変化が急速に進み、子ども同士で遊ぶ時間が大きく減ってきている。	○	32	8	80%
3	児童期(小学生の時期)は徐々に家族よりも仲間のほうが重要な位置を占めるようになり、これは発達上重要な変化である。	○	31	9	77.5%
1	小学校1年生(6歳)が小学校6年生になると、男の子も女の子も、身長が平均で()センチメートル程度伸びる。	30	29	11	72.5%
16	宿題をする時間やお手伝いをする時間を、世界の子どもと日本の子どもで比較すると、(世界の子どものほうが長い・日本の子どものほうが長い・変わらない)。	世界の子どものほうが長い	25	15	62.5%
5	道徳心は幼児期より徐々に身についていくが、小学生だと道徳的判断(例えば善悪の判断)の基準は、権力(権威)に従うか、従わないかである。	×	24	16	60%
2	小学校1年生(6歳)が小学校6年生になると、男の子も女の子も、体重が平均で()キログラム程度増加する。	20	23	17	57.5%
19	学校内における暴力行為の発生件数は、小学校では年々減少している。	×	22	18	55%
9	小学生にやる気を出させるには、ご褒美を用意したり、叱ったりすればよい。	×	19	21	47.5%
11	ここ20年程度で、男子の性的成熟に達する(第二性徴を迎える)年齢がしだいに遅期化している。	○	17	23	42.5%
17	小学生の不登校児童数は年々増加し、全児童に占める割合は3%程度である。	×	12	28	30%
13	子どもが社会性を身につけるために、大人が子どもに常識や道徳などを教えることが最も重要である。	×	6	34	15%
4	小学校高学年になると、勉強のできる子とできない子との能力差が目立ってくる。	×	4	36	10%
18	最も典型的ないじめ行為である「仲間はずれ・無視・陰口」について、小学校4～6年生の被害経験をみると、男女ともに()%程度の子どもが被害を経験している。	40	0	40	0%

注: No18については、10, 20, …, 90のいずれかで回答するように指示した。

Table 4 小テスト「思春期・青年期」の回答結果 (n=41)

No	問題	正解	正答者数	誤答者数	正答率
16	青年期は、理想と現実のギャップから自己嫌悪に陥りやすい。	○	40	1	97.6%
2	青年期は自分探しの時期であり、揺るぎない自分を確立することが必要である。	○	38	3	92.7%
4	青年期に親子関係は大きく変化し、子どもは親から精神的に自立していく。	○	38	3	92.7%
17	非行、暴力行為は思春期（中高生）に多く起こり、青年期を過ぎると沈静化する。	○	38	3	92.7%
7	経済的には親から自立しても、結婚するまで親元（実家）で暮らす、いわゆる「パラサイトシングル」が増加している。	○	36	5	87.8%
6	日本では義務教育終了後、ほぼ全員が高等学校に進学し、高等学校卒業後も2/3以上が大学や専門学校に進学する。	○	32	9	78.1%
9	青年期は神経性障害などの各種精神障害の好発期である。	○	25	16	61.0%
14	1990年代以降、ひきこもりが社会的に注目を浴びるようになった。内閣府の2010年調査では15～39歳の広い意味でのひきこもり者は約（ ）万人と推計された。	70	25	16	61.0%
18	母性や父性はもともと備わっているわけではない。	○	24	17	58.5%
15	性同一性障害者の多くは、物心がついたころから自身の性別に違和感を感じはじめることが多く、80%以上が（ ）までに性別違和感を持っていた。	中学生	23	18	56.1%
5	青年期の友人関係の特徴として、傷つくことを避け、表面的なつきあいしか求めない傾向があげられる。	○	22	19	53.7%
1	以前と比べて、思春期・青年期ははじまる時期が早くなり、終わる時期も遅くなっている。	○	14	27	34.2%
8	平均初婚年齢は男女とも上昇傾向にあり、男性、女性ともは30歳を超えている。	×	14	27	34.2%
10	新卒者の3年以内の離職率は高く、高卒者の50%、大卒者の30%に上る。	×	14	27	34.2%
3	男らしさ、女らしさは先天的に備わっているものであり、青年期までに性役割観が形成される。	×	11	30	26.8%
13	さまざまな調査を総合すると、一般の中高生の約（ ）%がリストカットをしたことがあり、そのうちの（ ）%は常習者であると推測される。	10・60	10	31	24.4%
11	総務省の2015年調査によると、中高生世代のソーシャルネットワークサービス利用者の割合は（ ）%程度である。	60	8	33	19.5%
12	日本性教育協会の2011年調査によると、性交経験率は中学生では10%に満たないが、高校生では20%程度、大学生では50%程度であり、この高校生、大学生の数値は前回2007年調査と比べると、(増えている・減っている・変わらない)。	減っている	8	33	19.5%
19	高等学校を中途退学する高校生は毎年（ ）万人以上いる。	5	7	34	17.1%
20	近年、未成年（20歳未満）の人工妊娠中絶実施率は（増えている・減っている・変わらない)。	減っている	2	39	4.9%

注1：No14は10, 30, 50, 70, 90のいずれかで回答するように指示した。

注2：No11については、10, 20, …, 90のいずれかで回答するように指示した。

注3：No15は小学校、中学校、高等学校のいずれかで回答するように指示した。

注4：No19は1桁の数字で回答するように指示した。

が1桁であった設問はなかった。児童期については、No.8, 12, 14は正答率90%以上であった一方、No.18は正答者が0名であった。思春期・青年期については、No.2, 4, 16, 17は正答率90%以上であった一方、No.20は正答率が1桁であった。このように、どの発達段階に関しても、項目によって正答率に大きな差が認められた。

各発達段階における平均正答率（標準偏差）は、乳児期が58.8% (28.6)、幼児期が62.0% (25.1)、児童期が61.5% (28.7)、思春期・青年期が52.3% (29.3)であり、各発達段階を独立変数、平均正答率を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、平均正答率の有意な差が認められ ($F(3,57) = 8.56, p < .01$)、多重比較の結果、乳児期、幼児期、児童期の間には平均正答率の差が認められないものの、思春期・青年期は他の発達段階に比べて平均正答率が有意に低いことが示された。

考察

今回の対象者の大部分は、高等学校までに心理学の講義を正式に受けた経験を持っていないと考えられる。その意味では、心理学に対して白紙に近い状態にあるとも考えられるが、自らの体験に裏打ちされた、あるいは今までに見聞きした情報を基にした、多くの誤りを含んだ知識を持っていることが今回の結果からも明らかになった。

例えば、思春期・青年期の設問にある「近年未成年の人工妊娠中絶実施率は<増えている・減っている・変わらない>」は90%以上が「増えている」「変わらない」と回答し、児童期の設問にある「小学校の不登校児童数は年々増加し、全児童数に占める割合は3%程度である」は70%が「正しい」と回答していた。さらに児童期の設問にある「最も典型的ないじめ行為である「仲間はずれ・無視・陰口」について、小学校4～6年生の被害経験をみると、男女ともに()%程度の子どもが被害を経験している」では、40が正答であるのに対し、約2/3が少なめに、約1/3が多めに回答し、正答者は0名であった。保健医療職者や教育職を目指す学生であることから、こうした事象に興味関心を持ち、ある程度知識もある

のではないかと予想していたが、マスメディアの情報等で、誤った、過大な、あるいは過小なイメージを持っていると考えられた。

しかし、乳児期の設問にある「生後数ヶ月の間に特定の人と情緒的な「きずな」を築くことが、その後の対人関係に重要な役割を果たす」は発達心理学の重要概念である愛着に関する問題であるが、70%の学生が正解した。幼児期の設問である「幼児は見た目に惑わされる傾向があり、同じ量のジュースでも細長い容器に入れると多くなったように思ってしまう」や「幼児はおもちゃや絵本など生命のないものに生命や意思があると考えられる」も、ジャン・ピアジェの認知発達理論の中心概念である保存の法則（この設問では量の保存¹³⁾とアニミズム¹⁴⁾に関する問題であるが、90%以上の学生が正解した。これらの設問は学生自身が自分自身の過去や弟妹や親戚の子どもの様子から容易に想像しやすい内容であると考えられ、こうした内容についてはある程度正しい知識を持っていると考えられた。

また、正答率の低い設問、例えば乳児期の「出産3～4日で赤ちゃんの体重は<増える・変わらない・減る>」、幼児期の「昔に比べてオムツを取る（トイレで自分で排尿排便させる）時期は早くなっている」、児童期の「子どもが社会性を身につけるために、大人が子どもに常識や道徳などを教えることが最も重要である」、思春期・青年期の「日本性教育協会の2011年調査によると、性交経験率は中学生では10%に満たないが、高校生では20%程度、大学生では50%程度であり、この高校生、大学生の数値は前回2007年調査と比べると<増えている・減っている・変わらない>」等は、学生自身の過去の体験の記憶がなかったり、学生にとって身近な内容でなかったりするため、正答を導くことが難しかったと考えられた。

これらのことから、学生自身の過去の体験や弟妹や親戚の子どもの様子でわかる内容や学生に身近な内容は正しい知識が身につけている可能性が高い一方で、こうした内容でない場合はマスコミ等のさまざまな情報に影響を受け、必

ずしも正しくない知識を身につけてしまっていることが示唆された。よって、発達心理学を講ずる際には、学生の体験だけではわかりづらい内容、学生にとってあまり身近でない内容については時間を割いて説明する必要があるだろう。また、こうした内容は学生にとってイメージしづらい内容であるとも考えられることから、写真や映像等を使用し、イメージが湧きやすくする工夫も必要かもしれない。

そして、今回乳児期、幼児期、児童期に比べて思春期・青年期は有意に平均正答率が低いことが示された。大学生は現在青年期にあるわけであり、思春期・青年期の知識については、むしろ正答を導きやすいと思われるが、結果は逆であった。思春期・青年期の平均正答率の低い設問は「高等学校を中途退学する高校生は毎年（ ）万人以上いる」や「近年、未成年（20歳未満）の人工妊娠中絶実施率は<増えている・減っている・変わらない>」等であり、今回本研究に協力した大学生は、これらの内容を高等学校の保健体育や家庭科で習ってきているはずであるが、中途退学や人工妊娠中絶といったものを身近なものと思えず、学生生活を送ってきた可能性が高く、それが影響していると考えられた。こうしたことから、高等学校までに習っているはずである、思春期・青年期の内容であっても、大学生にとってあまり身近でないかもしれない内容については時間を割いて丁寧に説明する必要があると言える。

最後に、今回の結果は設問の設定（正誤を問うのか、数字を回答するのか、語句を選択するのか）に影響を受けている可能性がある。また講義の都合で質問項目が適切でないものも入っている。よって、今後設問を修正して、更なる検討を重ねたいと考えている。

引用文献

- 1) 丹治哲雄, 木島恒一, 山下雅子, 他. 大学新入生の持つ心理学知識 (1) 人間科学部人間科学科新入生の場合. 教育研究所紀要 (文教大学). 2003; 12: 85-92.
- 2) 丹治哲雄, 木島恒一, 山下雅子, 他. 大学新入生の持つ心理学知識 (2) 人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較. 教育研究所紀要 (文教大学). 2005; 14: 95-103.
- 3) 丹治哲雄, 木島恒一, 山下雅子, 他. 大学新入生の持つ心理学知識 (3) 人間科学部新入生と法学部・経済学部新入生との比較. 教育研究所紀要 (文教大学). 2006; 15: 101-110.
- 4) 木島恒一, 山下雅子, 野瀬出. 社会人学生の心理学知識と誤信念. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要. 2015; 8: 151-158.
- 5) 木島恒一・山下雅子・野瀬出. 高校生の心理学知識. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要. 2013; 6: 109-116.
- 6) Furnham, A. Lay Theories: Everyday understanding of problems in the social sciences, New York: Pergamon Pr; 1988.
- 7) Kelley, H. H. Common-sense psychology and scientific psychology. Annual Review of Psychology. 1992; 43: 1-23.
- 8) Lilienfeld, S. O., Lynn, S. J., Ruscio, J., et al. 50 Great Myths of Popular Psychology: Shattering Widespread Misconceptions about Human Behavior. Chichester, Wiley-Brackwell, 2010.
- 9) 渡辺弥生, 大川真知子. 母親の育児知識と育児不安の関係. 法政大学文学部紀要. 2017; 74: 81-94.
- 10) 日本小児保健協会. DENVER II — デンバー発達判定法一. 日本小児医事出版社; 2009.
- 11) 小野寺敦子. 手にとるように発達心理学がわかる本. かんき出版; 2009.
- 12) 高橋一公, 中川佳子. 生涯発達心理学 15 講.

北大路書房；2014.

- 13) Piaget, J. La psychologie de l'intelligence.
Paris : Librairie Armand Colin, 1947.
(ジャン・ピアジェ (著) 波多野完治, 滝沢武久
(訳). 知能の心理学. みすず書房, 1998.)
- 14) Piaget, J. Six études de psychologie
(Anglais) Poche, Denoel, 1964. (ジャン・
ピアジェ (著) 滝沢武久 (訳). 思考の心理
学. みすず書房, 1999.)

Knowledge of University Students of Health Sciences in Relation to Human Development : Focusing on Infancy, Early Childhood, Childhood, and Adolescence and Young Adulthood

Keisuke Mori

Center of Teacher Training, Ashikaga Institute of Technology

Abstract

【Purpose】 This study aimed to clarify what knowledge college students at the Faculty of Health Sciences have about human development, especially human development in infancy, childhood, and adolescence/young adulthood.

【Methods】 A short test about the development in “infancy,” “early childhood,” “childhood,” and “adolescence and young adulthood” was administered to three male and 38 female first-year students of the Faculty of Health Sciences at “A” University in the Kanto region, who attended the course titled “Developmental Psychology” (a half-year course of 15 sessions) which the author taught in Academic Year 2016, and their answers were analyzed.

【Results】 It was clarified that the extent of students’ knowledge varies considerably from item to item about any of infancy, early childhood, childhood, adolescence and young adulthood and that there are some items that they understand equally while there are other items that they do not know well.

【Conclusion】 It is suggested that students acquire correct knowledge about matters which are easy for them to understand because of their own experience, etc. while otherwise, they may have acquired incorrect knowledge.

Key words: Development psychology, Infancy, Early Childhood, Childhood, Adolescence and Young Adulthood